



# 愛知県陶磁美術館

AICHI PREFECTURAL CERAMIC MUSEUM

県政記者クラブ、中部芸術文化記者クラブ、瀬戸市政記者クラブ同時

2026年1月15日（木）

愛知県陶磁美術館学芸課

担当 田畠、大槻

電話 0561-84-7474

愛知県県民文化局文化部文化芸術課

振興グループ

担当 藤井、伊藤

内線 2459、5666

ダイヤルイン 052-954-6183



本展は、日本の茶の湯・煎茶、そして西洋のティーカルチャーにおける茶器の美意識を比較展示します。

茶の湯は、侘びの美意識に基づき、質素で研ぎ澄まされた美が特徴です。

煎茶は、中国の文人が好んだ清らかで自由な美意識を背景に、古今の多彩な器を組み合わせる点が特徴です。

一方、西洋のティーカルチャーは、17世紀末に定着し、19世紀のアフタヌーンティーへと発展した、同じ形・デザインで揃える美意識が特徴です。

プラトンの『饗宴』にちなみ、これらの茶器の美意識が対話するように、それぞれの特徴や差異を紹介します。

## みどころ

- ◇ 新収蔵！一宮の織維商で近代の数寄者・森家の煎茶道具を公開。
- ◇ 安土桃山時代から江戸時代中期の茶の湯道具を取り合せて紹介。
- ◇ 19~20世紀のヨーロッパ諸国のティーセットを一堂に展示。

- 1 展覧会名** 企画展「茶の饗宴—和洋茶器くらべ」  
(英文 : TEA SYMPOSION: CONTRASTING TEA WARE)
- 2 会期** 2026年3月20日（金・祝）から5月17日（日）まで  
休館日：毎週月曜日（ただし、5月4日（月・祝）は開館）
- 3 開館時間** 午前9時30分から午後4時30分まで（入館は午後4時まで。  
ただし、3月20日（金・祝）は開会式のため午前11時から）
- 4 会場** 愛知県陶磁美術館 本館1階 展示室1-A  
(瀬戸市南山口町234番地 電話 : 0561-84-7474 (代表))
- 5 展示構成** 開宴 — そして、再びこの場所へ  
第一席 茶の湯の美  
第二席 煎茶の美  
第三席 The Beauty of Western Tea Culture  
第四席 饗宴  
終宴  
主な展示作品は別紙のとおり
- 6 観覧料** 一般 600円 (480円)、高校・大学生 500円 (400円)、  
中学生以下無料  
※ ( ) 内は20名以上の団体料金  
※ 各種割引制度があります。  
詳細は愛知県陶磁美術館の公式 Web ページで御確認いただきか、  
「11 問合せ先」へお尋ねください。  
(<https://www.pref.aichi.jp/touji/user-guidance/index.html>)
- 7 開会式について**  
(1) 日 時 2026年3月20日（金・祝）午前10時30分から午前11時まで  
(2) 会場 愛知県陶磁美術館 本館1階 ロビー
- 8 メディア担当者向け内覧会について**  
メディア担当者向け内覧会を開催します。当館学芸員が、企画展の展示を御案内します。  
(1) 日 時 2026年3月20日（金・祝）午前9時30分から午前10時まで  
(2) 会場 愛知県陶磁美術館 本館1階 展示室1-A  
(3) 留意事項 参加を御希望の方は、2026年3月19日（木）までに「11 問合せ先」  
へ御連絡ください。

## 9 関連事業

### (1) 「饗宴茶会」煎茶・抹茶の喫茶と茶器鑑賞

(全4回、要事前申込・要参加料、各回定員 15名 各回1時間30分程度)

日 時 4月12日(日) ①午前10時~/②午後2時~

5月17日(日) ③午前10時~/④午後2時~

共 催 茶室「陶翠庵」(会場)、煎茶道売茶流

※参加料、お申し込み方法、会場などの詳細は公式Webページにて御案内します。

募集期間 ①・② 3月20日(金・祝)午前11時から4月1日(水)午後1時まで

③・④ 4月28日(火)午前11時から5月7日(木)午後1時まで

※応募多数の場合は抽選とさせていただきますので、御了承ください。

### (2) 担当学芸員によるギャラリートーク

(要観覧券、事前申込不要、先着20名程度)

日 時 3月28日(土)、4月5日(日)、4月25日(土)、5月10日(日)

各回午後1時30分から1時間程度

## 10 主 催 愛知県陶磁美術館

後 援 愛知県教育委員会、愛知高速交通株式会社(リニモ)

## 11 問合せ先 愛知県陶磁美術館 学芸課 担当 田畠・大槻

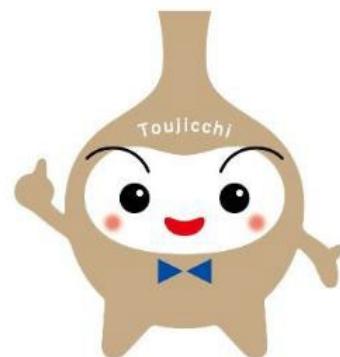
〒489-0965瀬戸市南山口町234番地

電 話: 0561-84-7474(代表)

F A X: 0561-84-4932

メール: touji@pref.aichi.lg.jp

茶の湯、煎茶、西洋の茶文化について、それぞれの茶器を見くらべてみる、ありそうでなかつた  
展覧会!  
茶器が語る、東西の美意識を楽しみましょう!



当館マスコットキャラクター  
とうじっち

# 特別展 「巨匠ハインツ・ヴェルナーの描いた物語 —現代マイセンの磁器芸術—」

メルヘン

ヨーロッパを代表する名窯、マイセン。18世紀に王立の磁器製作所として創業したマイセンは、ヨーロッパ初の硬質磁器焼成に成功し多くの名品を世に送り出してきました。

1960年に創立250年を迎えたマイセン磁器製作所で活躍したアーティストの一人、巨匠ハインツ・ヴェルナー(Heinz Werner 1928-2019)は、夢の世界へと誘う魅力的なデザインで現代マイセンを代表する数々の名品を生み出します。

本展では、巨匠ハインツ・ヴェルナーが創造した名作を中心に、現代マイセンの美しき磁器芸術を御紹介します。



## 《サマーナイト》ティーサービス

マイセン 1974年頃 個人蔵

装飾：ハインツ・ヴェルナー

器形：ルードヴィッヒ・ツェプナー

※本展の詳細は、2026年3月下旬頃に発表予定です。

**1 会期** 2026年5月30日（土）から9月27日（日）まで  
休館日：毎週月曜日

**2 開館時間** 2026年5月30日（土）～6月30日（火）：  
午前9時30分から午後4時30分まで  
2026年7月1日（水）～9月27日（日）：  
午前9時30分から午後5時まで  
(入館は各閉館時刻の30分前まで)

※開館時間は変更になる場合があります。最新の情報は愛知県陶磁美術館の公式Webページで御確認ください。

**3 会場** 愛知県陶磁美術館 本館1階 展示室1-A、1-B  
(瀬戸市南山口町234番地 電話：0561-84-7474（代表）)

## 【桃山陶 革新的デザイン】



正面



裏面

## 【名物茶入 六歌仙の風格】



## 【大胆な造形と備前特有の窯変に注目】



くろおりべ ちゃわん

## ①黒織部茶碗

美濃窯

安土桃山時代（16世紀後半～17世紀初頭）

加藤舜陶氏寄贈

黒織部は、焼成中に窯から引き出して急冷させる「引き出し黒」の技法により、鉄釉を漆黒に発色させた陶器です。これは瀬戸黒や織部黒などにも共通する技法です。

本作品のような黒織部は、江戸時代初期に唐津から導入された「連房式登窯」で量産されました。茶碗は多くが沓形で、黒釉の一部を窓抜きにして絵を描いたり、黒釉を搔き落として織部独特の幾何学文や花文様を表しています。この技法により、繊細な意匠が可能となりました。

おりべ ちゃいれ めい きせん

## ②織部茶入 銘「喜撰」

美濃窯

安土桃山時代（16世紀後半～17世紀初頭）

胴部にはロクロ目が残り、大胆な縦のヘラ削りや鉄釉の流し掛け（なだれ）が施され、正面には細長い文様が描かれています。底部は内側へ削り込んだ揚底で、中央に「イ」の刻銘があるのが特徴です。

銘の「喜撰」は、遠州流十二世家元の小堀宗慶により、六歌仙の一人である喜撰法師にちなんで命銘されたものと考えられています。

や は づ ぐ ち み み つき み づ さ し

## ③矢筈口耳付水指

備前窯

安土桃山時代（16世紀後半～17世紀初頭）

備前焼は、15世紀後半に信楽焼と共に茶の湯に取り入れられた国産陶器です。本作品は桃山時代の天正年間（1573～1592）後期頃の流行を反映した茶道具です。ロクロ成形後に歪みを加え、大胆なヘラ目や備前特有の赤褐色の窯変の景色が見える力強い造形が見どころです。

わび茶の精神を体現した作風は、備前が早くから本格的な茶道具生産に取り組んでいたことを伝えています。

## 【近代の一宮の数寄者 森家の煎茶道具】



### ④煎茶道具一式 (棚飾り)

江戸時代・明清時代 (17～19世紀)

森克彦氏寄贈

一宮市の繊維産業の歴史を語る上で欠かせない老舗企業である森林商店（現在のモリリン株式会社）の森林兵衛（1855～1945）が催した煎茶会の図録『竹翁金婚祝賀会図録』の煎茶席を再現し、煎茶流行期の最末期の様相を伝えます。

中国明清時代の名品を中心とした、煎茶の棚飾りとして紹介します。

## 【煎茶人の憧れ、ぐりんだま】



### ⑤梨皮泥具輪珠茶銚

宜興窯・中国

清時代後期 (18～19世紀)

森克彦氏寄贈

中国を代表する茶銚の産地、宜興窯で制作された作品です。粘土板を筒状に巻いて成形し、木製工具で叩いて造形する「打身筒（パンパン技法）」で作られています。朱泥の素地に異色の土粉を混ぜ、梨の皮のような斑紋がみられる「梨皮泥」が特徴です。球形の小形で、短い注口と笠形の蓋を持つこの形式は「俱輪珠」と呼ばれ珍重されました。

専用の桐箱と複数の仕覆（茶道具を入れるための袋）用の箱が仕立てられており、大切に愛玩されていたことがうかがえます。

## 【至福の一杯、天に昇る】



### ⑥青花火馬文茗碗

景德鎮窯・中国

明末清初 (17世紀)

森克彦氏寄贈

中国の青花（染付）技法による茗碗で、五客揃いの品です。器の口縁部と高台には圈線が施され、胴部には飛馬文、飛雲文、点文が染付で描かれています。高台の裏には「大明成化年製」の銘が入っています。くり抜きの桐箱と仕覆が付属しており、かつては備前岡山藩八代藩主である池田慶政公（1823～1893）が所蔵していた貴重な作品です。

## 【古伊万里風の人気シリーズ】



### ⑥ティーセット《ジャパン》

ロイヤルクラウンダービー・イギリス

20世紀

1748年に創業したダービー社は、チェルシーに続く英国磁器の中心地として発展した名窯です。1775年にジョージ3世から「クラウン」、1890年にヴィクトリア女王から「ロイヤル」の勅許を賜り、英国で唯一これら二つの称号を冠しています。

最大の特徴は、日本の伊万里焼（金襷手）の影響を色濃く受けたデザインです。マイセンの柿右衛門写しと並び称されるこの様式は「JAPAN」の名で知られ、200年以上にわたり同社を象徴するシリーズとして世界中で愛され続けています。

## 【日本由来のインドの花】



### ⑦ティーセット《インドの花》

ヘレンド・ハンガリー

デザイン：1867年

製作：20世紀

約200年の歴史を持つヘレンドは、万国博覧会の出品などにより、ヨーロッパ各国王室におけるコレクションの一つになっています。

フランス・ナポレオン三世の皇妃ウージェニーは、1867年のパリ万博で日本の柿右衛門写しである「インドの花」を見出し、それを外交の舞台で使用することで、ヘレンドを一流の窯として世界に知らしめました。

日本の磁器はオランダ東インド会社を通じてヨーロッパに運ばれていたため、「インド」の名が冠されています。

※広報用の高精細画像につきましては、愛知県陶磁美術館担当までお問い合わせください。